

## こぶ取りの神さま

おかし、おかし、上境かみさかいに仙蔵という働き者の若者がおつたと。

仙蔵はたいそう力があつてな、畑を耕たがやす時は大きくて重い鋤くわを使った。そんなもんで、畑は深く耕やせ作物がたくさんとれたと。

ある秋の初め、見知らぬ爺じいさまが仙蔵の鋤使いをじっと見ていて声をかけた。

「これ若いかた、たいそう精が出るのう、今度はわしの鋤も使ってみろや」

見るとりっぱな鋤でな、仙蔵は手に取って二、三べん振ってみたと。

「いやあ、実にいい鋤だあ、こてをおれに使わせてくれんのげ」

「ザクツ　ザクツ」

使ってみると、それは調子が良くてな。傍らにいた爺さまは、その鋤使いの見事さにしてばし見とれておつた。畑は、みるまに耕されたと。

すると、爺さまは、

「わしは矢板の川崎村のもんじや、この鋤くわはおめえにやっから、あとでわしを訪ねて来いや」

そう言い残して帰って行つたと。

そして、秋の取り入れも終わった頃、仙蔵は爺さまがくれた鋤を持って川崎村を訪ねた。村の人に鋤を見せると、

「これは庄屋しょうやさまの鋤だー、おらが連れでつてやっから」

そうして、白壁土蔵しろかべどくらうの大きな家いえに着いたと。久しぶりにあつた爺さまは大喜びで

「わしは、この鋤を使いこなせる若者を探しておつた、どうかこの家の跡取りあととになつてくれや」

こうして、仙蔵は庄屋さまになった。心優しい仙蔵は村人から

「仏の庄屋さま　仏の庄屋さま」

と、慕したわれてな。

けんど、どうした事か、そんな仙蔵の耳のうしろに大きなこぶができてな、医者さまに診みせても、拜おがんでもらつても、どうしても取れねえんだと。

ある夜のこと、困りはてた仙蔵に夢のお告げがあった。

「―上境かみさかいの熊野くまの権現ごんげんに願がんをかけよ―」

「あーそういえば、ふるさとの上境にしばらく帰ってねえなあ。きつと郷さとの神様が怒っていならるんだ」

そして次の日、仙蔵はたくさんのお供そまえ物ものを持って、権現様と御先祖様をお参まりしたと。

「帰って来やした、長い事すまんこってしたなあ」

すると、半年もたたない頃だ、不思議な事に仙蔵の大きなこぶがすーっと、消えてしまったと。

「なんとありがたい、ありがたいこったあ」

喜んだ仙蔵は、権現様にお礼として「調子山熊野三社大権現ちようしやまくまのさんしゃだいごんげん」と彫ほった重い石を、自らかついで調子山のとっぺんにお奉まりしたんだと。

そこは、山つつじや藤の花が咲き乱れ、那珂川と烏山の街並みも見渡せる、ええ所なんじゃ。

さぞや、権現様も喜んでいなさるべー。

おしまい

(野州烏山の民話より)

## ひとロメキ

今でも調子山から流れ出ている水があり、地元の人々は権現様の「御聖水」として、大切にしています。